IS(インフィニット・ストラトス)～魔神がいく物語～

紅　幽鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）～魔神がいく物語～

【Ｎコード】
Ｎ２７８５Ｙ

【作者名】
紅　幽鹿

【あらすじ】
みなさん知っていますか？【魔神】という一族を…彼らは、悪魔と神の血を受け継ぐ一族…その力は世界を滅ぼすほどの力を持っている…
その一族の一人である。博麗幸夜（はくれいこうや）は自分の両親にある依頼を受けて、相棒の鳴海悠二（なるみゆうじ）と一緒にＩＳ（インフィニット・ストラトス）の世界に訪れる…
さてさて、彼らがもたらすのは、終焉か…それとも…

この作品は色々と設定を詰め込む場合があると思います。それが嫌だという人は回れ右をしてください。

零話～プロローグ～（前書き）

これは、魔法少女リリカルなのは～クリムゾンデビルゴット～のキャラクター達が出ます。

これからもよろしくお願いします。

零話～プロローグ～

♪～♪～♪

暗い研究室の様な所で、機械音が辺りに鳴り響く。

そして、研究所の様な所の奥にいると、独特なうさ耳をつけ、【不思議の国のアリス】のアリスが着ていそうな服を着ている女性が、空中に浮いているディスプレイを見ていた。

そして、ディスプレイを見ている女性の後ろから二人の男性？がこちらに向かってきた。

一人は、長身で目の色が右が金、左が翠と片方ずつ違っており。濁った金色の髪をポニーテールにして、真っ黒と言っていいほどの色をしたコートの様なものを纏っている。

もう一人は、これまた長身で目の色が金色で、銀髪を肩にかかるぐらいの長さで切り揃えており、白いスーツを着ている。

「篠ノ之、僕たちを呼び出してどうしたんだ？」

「そうだぞ束。俺たちに用っていた言い何なんだ？」

二人がそれぞれ口を開く。二人の言葉が苗字と名前を言っているのなら、この女性の名前は篠ノ之束（しのぬぼね）と言うらしい。

「やあやあ☆コウ君にユウ君。君たちにはＩＳ学園に行ってもらい

ま～す♪ブイブイ♪」

「「はぁ？」」

この束の言葉に二人は一瞬固まり、そして…

「よし、そこに直れ人間（ヒューマン）どうやら貴様の脳は壊れたようだな。安心しろ僕が一旦解体して直してやる。」

黒いコートをまとった男が、いつの間にか出したナイフを束に向かって突きつける。

「ちょっと待て幸夜！！落ち着け！落ち着くんだぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

それを見たスーツを着た男がナイフを振り回す男…幸夜を止める。そして、ナイフを持った幸夜はスーツを着た男性に止められたことによって、ナイフを仕舞う。

「悠二…僕はもう【幻想郷】に帰りたい。」

「…俺もだよ。」

二人が思い出すのは、この【世界】に来る前にした。幸夜の両親とのやり取りである。

「それで、如何して俺たちをＩＳ学園に入れようとするんだ？」

スーツを着た男…悠二が束に聞くが…

「悠二、それは簡単だろ？こいつのことだ、自分の妹である【篠ノ之箒（しのゆのき）】を守ってほしいとか言うんだろ？」

幸夜は束を見ながら言う。束は一瞬驚いた顔になるが…

「さすが、コウ君♪分かってたか～…もう一度二人にお願いするね。ＩＳ学園に行って箒ちゃんを守ってあげて。」

束は先ほどとは違い真剣な声色で二人に言う。その束を見た二人は…

「了解した、篠ノ之。」

「その願い俺たちが叶えてやるよ。」

二人は笑いながら言った。

…この時は誰も思わなかっただろう。このやり取りから、この【世界】の物語が始まったということを……

オリ主設定（ネタばれ注意）（前書き）

今回は幸夜だけの設定です。

次は悠二とＩＳの設定を書いて、本編に行きたいと思います

オリ主設定（ネタばれ注意）

名前：博麗幸夜（はくれいこうや）／零崎紅識（れいざきこうしき）

二つ名：冷血の皇帝（クルエル・エンペラー）、魔術師殺し（ガス・マーダー）、絶対女帝（アブソリュード・エンプレス）、鮮血の執事（フレッシュブラッディ・バトラー）、悪魔喰い（デビルズ・イーター）、化物喰い（フリースク・イーター）、世界殺し（オーバーキル・パレード）、人外最悪、大量殺戮祭、青騎士、詐欺師、博麗の夫

種族：魔神

年齢：１０００歳以上（外見年齢は１６歳）

好きなもの／得意な事：食べる、料理、人形作り、人間、子供、家族、霊夢、仲間、甘い物、煙草、酒、冷たい物、射撃

嫌いなもの／苦手な事：人間、自分は正義だという人間、子供を人体実験の材料にするやつ

容姿：顔はＦａｔｅのセイバーオルターの瞳を金と翠のオッドアイで、髪は銀と黒のリボンで結んでポニーテールにしている。身長は１８０?と長身だが、何故か顔とのバランスがとれているように見える。服装は牙狼に出てくる、冴島鋼牙が着ていた服を漆黒に染めたもの。

幸夜は幻想郷にいる博霊霊夢と結婚しており子供が二人おり、３人を溺愛している。

彼は、神、悪魔、妖怪の血が流れている。

人間をもっとも醜い種族で、もっとも愛すべき種族だと考えている。普段は、温厚で優しそうだが、彼が本気でキレれば、あたりに濃い殺気が充満し、それと同時に血の匂いも出てくるほどやばい何かになる。彼はこれを「【零崎化】、ただのしょうもない【殺人鬼】になるだけ」と言っている。そして、零崎化すると、彼の二つ名と同じである大剣『大量殺戮祭（オーバーキルパレード）』うを使い、首を跳ね飛ばす。

それと、色々な世界を回ってきているため。たくさんの戦闘経験や【魔戒騎士】、【仮面ライダー】になれる。

ちなみに、魔戒騎士としての名は【青狼（せいろ）】仮面ライダーとしての名は【仮面ライダーダークネス】

能力：【創造と終焉を司る程度の能力】：この能力は幸夜が望む物はどんなものでも【本物】を創れることができ、幸夜が邪魔だと思う物は、たとえ【世界】でも終焉（こわせ）ることができる。幸夜いわくこの能力ほど【矛盾】を表している物はないらしい…

神眼：次元世界の魔眼をすべて扱える。

無限世界（アンリミテッドワールド）：固有結界、固有世界を複数所持することができ、有結界を同時に発動する事が出来る

二つの固

デバイス：エターナル・ゼロ

所持ＩＳ：ホルス

所持武器：聖遺物、創聖架す純白の剣（クレアチオ・ヴァイス・グラディオウネニス）、終焉架す漆黒の剣（シュヴァルツグラディオウスバーキル）、大量殺戮祭（パレード）、魔戒剣銃、炎刀・迦具土、水刀・玄武刻

ＣＶ：下野紘

オリキャラ設定（ネタばれあり）（前書き）

ＩＳとデバイスの設定は、後に出したいと思います。

あと、幸夜の設定を修正しておきました。

オリキャラ設定（ネタばれあり）

名前：鳴海悠二（なるみ ゆうじ）

二つ名：神狩り、月の頭脳の夫、人外最悪の相方（パートナー）、白き死神（ホワイト・デスーサイダ）、地裂灰燼（ルファング）、断絶劇場（ランダムノイローゼ）、鎖状僭主（クリムゾンチェイン）

種族：人間？

年齢：１００歳（外見年齢は１６歳）

好きなもの／得意な事：アニメ、松岡修造、仲間、家事、料理、永琳、仕事、家族、仲間、酒、祭り

嫌いなもの／苦手な事：　チート転生者、リリなのキャラ、八意印の薬

容姿：　十六夜咲夜を男性化した姿で髪を肩にかかるぐらいの長さで切り揃えている。目の色は金色。身長は高い方で服装は白色のスーツに白色のソフト帽子を被っている。

もともとはWとリリカルなのはが融合したリイマジの世界のライダーであり時空管理局の魔導師だったが、２０歳の時にチート転生者に敗れ無実の罪を着せられ投獄。そのまま１５年もの間冷や飯を食わされており、出所した時には両親をチート転生者に殺された上、幼なじみであったスバルとティアナもチート転生者に寝取られていた。
復讐心に駆られ無謀にチート転生者率いる機動六課に戦いを挑んだ際に偶然的に力に目覚め、その際にチート転生者を無我夢中で潰し、能力を奪い取った。
世界を渡り数多のチート転生者や神を狩っており、その度に力を奪い取っているため、悠二に勝てるチート転生者はあまりいない。
基本的に全てのライダーに変身出来るが、悠二は主に父親の形見であるロストドライバーとスカルメモリを用いてスカルに変身する方が多い。
実際は１００歳だが、チート転生者の能力の中に【不老不死】があり、それを吸収してから何故か１６歳のまま成長が止まっている。

クールな見た目に反して明るく飄々とした性格でオタクな熱血漢だが、なのは達やその周りにいるチート転生者を見ると一気に冷徹な殺人鬼に変わる…しかし、転生者達を殺している時に、仕事で転生者を殺しに来た幸夜と遭遇し、そのまま殺し合いをおこない、本当の【殺人鬼】、世界はたくさんあり、それ全てを恨むのは面白いけ

ど、可笑しいと、幸夜から教えてもらい。それ以来、無暗に殺さなくなり。現在は、幸夜の仕事の相棒（パートナー）をしている。

ちなみに、幻想郷にいる八意永琳とは結婚していて、子供が一人いる。

能力：【現象殺し】：幻想殺しの上位互換版で、魔法のみならず物理的な現象や概念までもを無効化する力である。

【他者の能力を強制的に剥奪する程度の能力】：名前の通りの能力で、悠二が能力を使うことを意識して触れた場合に発動し、触れられた相手は全ての能力を剥奪される

所持デバイス：トライアングルハーツ

所持ＩＳ：ジェフティ

所持武器：地裂灰燼（スーサイダルファング）、断絶劇場（ランダムノイローゼ）

CV：細谷佳正

第壱話～女子～

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

黒板の目の前で、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然がありまくりの副担任…山田真耶（やまだ まや）がそう言った。

季節は春…

新しい命、出会い、世界…ほとんどが新しくなる季節…

そんな季節の中、僕こと…博麗幸夜（はくれい こうや）はＩＳ学園という教室で……

……女子たちの視線を感じていた…

正確には、僕と僕の相棒（パートナー）である鳴海悠二（なるみ ゆうじ）と、『世界で初めにＩＳを使える男』である織斑一夏（おりむら いちか）だ。

ここで、このＩＳ学園とＩＳについて説明しよう。

ＩＳ…正式名称『インフィニット・ストラトス』は、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツで、開発当初は注目されなかったが、ＩＳ製作者である篠ノ之束が引き起こした『白騎士事件』によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がＩＳに移っていく…だが、

このＩＳにも欠点があり、『ＩＳは女性にしか動かせない』この欠点のせいで、この【世界】では、女尊男卑の世の中になっている。それで、このＩＳ学園は、ＩＳ操縦者を育てる教育機関だ……やっぱり、人間は『戦争』のことしか考えない…まあ、僕的には戦争なんて、ただの小さい子供の喧嘩と一緒だよ…

「（幸夜、幸夜…）」

そんなことを考えていると、悠二が念話を使ったのか、僕の頭に直接響くように悠二の声が聞こえる。

「（如何したんだ悠二？）」

「（俺、この視線は耐えられない…）」

「（僕もだよ…）」

「は、はいっ？！」

こんな素っ頓狂な声を聞いて、僕と悠二は念話を中止する。

声の主…織斑一夏が涙目になっている山田先生と話しておりその後、後ろを向く…織斑一夏よ、先生を涙目にするほどのことをしたのか？

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

辺りの空気が凍える…かわいそうに、こんな空気の中続きを言うのか…

すると織斑一夏は、深呼吸をして…

「・・・以上です」

がたたっ

織斑一夏の言葉が終ると同時に、女子の数名がずっこけた…

「あ、あのー…」

織斑一夏の後ろからかけられる声。涙目の山田先生がおり、織斑一夏の背後から黒服のサマースーツを着た女性がゆっくりと近づいていき……

パアンッ！

「いっ――――！？」

その女性は、織斑一夏の頭を殴り、織斑一夏がその女性の顔を見ると…

「げぇっ、関羽！？」

パアンッ！…また織斑一夏が叩かれた…

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声で、その女性が僕たちの方を見る…

「残りの男子二人、さっさと自己紹介をしろ。」

「（悠二どうする？）」

僕は念話で悠二に聞く。

「（俺から言うよ。）よっこらしょ…」

悠二が立ち上がると同時に女子と織斑一夏が一斉に注目する。

「俺の名前は鳴海悠二。尊敬している人物は、松岡修造だ。１年間よろしくお願いします。」

悠二が席に座る…今度は僕か…

「僕の名前は博麗幸夜。趣味は家事や人形作り、嫌いなものはクズです。それと、こうみえても男です。一年間よろしくお願いしします。」

僕は席に座る……誰だ？！いま、『男の娘』って言った女子生徒！！零崎始めｒ……ゴフン、ゴフン…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてやろうか？！

と、僕が暴走してるときに、自己紹介が終わったようだ…そして…

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

……カリスマ性があふれ出てるな～さてと、どうせこの後にはものすごい音波が出ると思うから…耳をふさぎますか…

「きゃぁぁぁっ！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

クッ？！耳を塞いでいてもこの威力だと？！

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！

「私、お姉様の為なら死ねます！

きゃいきゃい騒ぐ女子たちを織斑先生はかなりうっとおしそうな顔で見る。

「・・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。其れとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

・・・・・・・ポーズ・・・じゃないな……もうすこし、やさしくしたほうが・・・

「きゃあああああ！！！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして～！」

何だ、このクラスは？…変態ばっかりなのか？…ここに天子（てんし）を入れたらどうなる？もしくは幽香（ゆうか）さんがいたらどうなる？……うん、前者は変態度が上がって、後者はこの教室が血の海になるな……

その後・・・織斑一夏が織斑先生の名前を呼んで叩かれ、ＳＨＲは終わった…

第壱話～女子～（後書き）

後書きは次の話からしていきたいと思います！では！

第弐話～金髪～

ＳＨＲが終わった後、授業が始まった…

「―であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ―」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生……ふと、周りを見てみると、皆熱心にノートを取っている。

やはり、ＩＳを使えるだけあって、勉強熱心だな。…まあ、僕には関係ないけど…僕と悠二はここに来る前にＩＳについて…てか、この【世界】に来る前からＩＳは知っているから、ノートを取らなくても大丈夫。

そう考えながら、山田先生の方を見ていると、何かの視線を感じ、その場所を見ると……

「・・・」

織斑一夏が僕と悠二に視線を送っている。

『お前、理解できてるのか？』みたいな目でこちらを見ている織斑一夏……というか、あの目はそう語っている。

とりあえず僕と悠二は『理解できてる。』と言う顔で織斑一夏に返す。

それを受け取った織斑一夏は、何故か安堵の表情になる。

「そこ三人。何をしている」

「お、織斑君。今の場所で分からない場所がありましたか」

「はい」

それに気付いたのか、織斑先生が声を出し、山田先生が織斑一夏に分からない所があるかと聞き、織斑一夏がそれを正直に答える

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

エヘンとでも言いたそうに胸を張る山田先生……れ、霊夢の方がかわいいんだからな！！！！！！！！べ、別に山田先生が可愛いだなんて思ってないんだから！！

と、僕がこんな変なことをしていると、少しの間迷ってから、織斑一夏はハッキリした口調でこう言った…

「ほとんど全部分かりません」

……織斑一夏、正直すぎるだろ…まあ、正直なのは良いことだ。彼のことを【正直（リアリ）】と名付けようかな？

「ぜ、全部ですか・・・えっと、織斑君以外で今の段階で分からないという人はどれくらいいます？」

山田先生の問いに、だーれも手を上げない…手が動く気配すらない…

「や、博麗君と鳴海君は大丈夫ですか？　ついてこれてますか？」

山田先生が僕たちの方を見て聞いてくる…きっと、正直（リアリ）と同じ男だから心配してるんだろう…

「俺はしっかりと勉強してきているので大丈夫です。」

「以下同文」

「えぇっ！博麗と鳴海も分かってないんじゃないのかよ！！」

僕と悠二の言葉に正直（リアリ）が驚いたようにに言う…あれ？僕と悠二は『理解できてる。』と送ったはずだが？

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！

正直（リアリ）の頭に織斑先生の出席簿が直撃する…痛いだろうな……

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ」

正直(リアリ)はまだ頭を押さえている…織斑先生がこっちの方を向き…

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器をはるかに凌ぐ。その《兵器》を深く知らなければ、必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解しなくても覚えろ」

さすがは織斑先生。

「それと自分は覚えているからいいなどと、甘い考えをするなよ。もう一度言うがＩＳは《兵器》。実力を見誤った愚か者の余裕は、仲間を巻き込んだ事故を引き起こす。」

織斑先生の言うとおりだ……愚者は、仲間さえも巻き込み…殺す…人間の特性のひとつだな。

まあ、僕がそんな奴を見たら、血の伯爵夫人(エリザベート・バートリー)で痛めつけた後、僕の聖遺物の餌にする。

「分かったのであれば、授業を続ける。織斑は放課後、山田先生と私で理解できるまで教えてやる。異論はないな？」

「は、はい・・・」

「・・・山田先生。授業を続けてください」

「は、はいっ」

こうして、授業は進んでいった……

…今は休み時間

なんだかんだでさっきの休み時間に篠ノ之箒に連れて行かれ、話ができなかった織斑一夏と話そうかな？

え～と……どうやって話しかけようか…

よし！これにしよう！！

「さっきの冗談、傑作だぜ」

「戯言なんだよ」

「このネタわかるの？！」

僕が人識（ひとしき）の坊やの真似して言うと、正直（リアリ）が戯言（ざれごと）使いの坊やと同じことを言って、悠二が驚く……僕も正直驚いたけど……とりあえず、自己紹介をしようかな？

「改めて、鳴海悠二だ。よろしくな、正直（リアリ）。」

ちなみに、悠二には念話で僕がつけた二つ名を言っておいた。その時、僕と悠二はさっきの僕と正直（リアリ）と同じことをしている。

「博麗幸夜だ。これからよろしく、正直（リアリ）。」

「あぁ。織斑一夏だ。よろしく頼む鳴海、博麗……て、正直（リアリ）？」

正直（リアリ）が首を傾げる。

「あぁ、さっき織斑が正直に先生たちに答えてたろ？だから正直（リアリ）」

「別にそんなに正直に言ってるつもりはないぞ？あ、それと、一夏で良い」

「なら、僕と悠二も名前で良いよ」

さて、自己紹介も終わったし一応、聞いておくか……

「ところで一夏、篠ノ之とはどういう関係なんだ？」

「は？」

「だって、休み時間になるなり廊下に連れ去られてたじゃん。知り合いか？」

「ただの幼馴染だよ。一緒に剣道やってたんだ。六年ぐらい前に転校したっきりだったな・・・」

「へぇ～」

「ちょっと、よろしくて？」

「「「え？（は？）」」」

僕と一夏と悠二がしゃべっていると、誰かに呼ばれ振り返ってみると、そこに居たのは、金髪のドリル頭で白い肌をした女子だった……欧州出身だな。

高貴な感じもないとは言えないが、いかにもこの【世界】の女という感じだ。

「訊いてます？お返事は？」

「よかったな一夏。早速お呼び出しだぞ」

「何を言ってるんだ？悠二を呼んだんじゃないの？」

「あはは。俺みたいな奴を呼ぶ女なんていないだろ？幸夜か？」

「なら僕は、その事実を否定するわ。」

「貴方達三人を呼んだのです！！」

僕たちのやり取りを見て苛立ったのか、金髪ドリルが怒鳴る。

「それで、何？僕たち忙しいんだけど？」

「うっ……まぁ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられることだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

僕が少し睨むと、金髪ドリルが少し怯むが、すぐに勢いを取り戻し喋る……正直、ウザい…

『ＩＳが使えるのは女子だけ』という世界の常識ができてから、『女性＝偉い』な構図ができているから、ちょっと散歩のために街中歩いただけで、見ず知らずの女にパシリにされることもごく稀にある。

「焼きそばパン買ってきて。もちろん、あんたの自腹ね」みたいな感じで

大抵は無視して歩けば放置されるが、中には『暴力を振るわれた』なんて訳のわからない事を言い出す奴もいる。そのわけ分からないことに煽られて、事実確認もなしに『逮捕』なんてあるから大概だぶっちゃけ言うと、そういう高圧的な奴は目障りだ…

「人と話すときはまず自分の名を名乗るものだろう？それとも、そういう態度すら教わってないのか？貴様は？」

「そうそう。俺たち、君の名前知らない。」

悠二と一夏が金髪ドリルに向かって言う……悠二、少しキレてるな…すると金髪ドリルは、少し声を張り上げ…

「私を知らないといいますの？　この、セシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「ああ、知らない。」

「てか、興味ない」

「・・・貴方達、わたくしをバカにしていません？」

金髪ドリル……馬鹿にしてるにきまってるだろ。

「あのさ、質問いいか？」

一夏が手を挙げて言う。…まさか？

「一夏。この際時間とられるだけの『代表候補生って何？』なんて質問はやめろよ」

僕が考えていたことを悠二が言った。さすが相棒（パートナー）♪

「・・・」

……一夏は気まずそうに口を閉ざす……まじで？

「読んで字のごとくだ、一夏。ＩＳ操縦者の国家代表の候補生だよ」

「そういわれればそうだ」

・・・一夏、それぐらい分かろうよ……

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。その現実を、もう少し理解していただける？」

「興味なし」

「以下同文」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・貴方がた、私をバカにしていますの？」

よく分かってるじゃないか、金髪ドリル……一夏はどうか知らないけど

「バカニシテナイデスヨ～」

「以下同文」

「幸運だっていったの、そっちじゃないか」

「ま、まあ、いいですわ。何か分からない事が有ったら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ！何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから！！」

金髪ドリルがそう言うが…

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「俺も」

「以下同文」

「・・・は？」

僕たちの言葉にセシリアが固まる……僕、以下同文しか言ってない……

「じゃ、じゃぁ私だけたおしたっていうのは・・・」

「【女子限定】ってオチじゃないの？……チャイムなりそうだから、さっさと席つこうよ。悠二、一夏。出席簿アタックされるよ？」

「え、あぁ・・・」

「そうだな……」

「ちょっと！　そういって逃げ・・・」

キーンコーンカーンコーン

ちょうど良く3時間目を告げるチャイムが鳴る

「くっ・・・いいですか！またあとで来ますから、逃げないでください！」

誰が逃げるか…

三時間目が始まった……

教壇に立つのは織斑先生だ。…余程大切な内容なのだろう、山田先

生もノートを取ってる。

「あぁ。その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表を決めないといけないな。」

織斑先生がふと思い出したように言う……代表か～めんどくさそうだな～

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席・・・クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

織斑先生の話が終わった後、一斉に女子が手を上げ……

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれに賛成！」

「私は鳴海君を！！」

「私は博麗ちゃｎ……ゲフンゲフン、博麗君を！！」

「では候補は織斑一夏、鳴海悠二、博麗幸夜……他にはないか？自薦他薦は問わないぞ」

誰だ？！今、僕をちゃん付けで呼ぼうとした奴！！……って

「「「って、俺ぇ（僕ぅ）！？」」」

「織斑、鳴海、博麗、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか？

いなければこの三人で選ぶぞ。」

クッ、このままじゃあ、めんどくさいことをしないといけなくなる……こうなったら！！

「織斑せんｓ「織斑先生！俺は、幸夜のサポートをしたいので降りたいのですが？良いでしょうか？」ゆ、ゆ…」

悠二ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！

おのれ悠二、僕が言おうとしていた言葉を先に言いやがった！！

「そうか……なら、織斑と博麗の二人の仲なら選ぶぞ。」

「いや、俺やらな・・・」

一夏が無駄な抵抗をするが………

「自薦他薦は問わないと言ったはずだ。選ばれた以上、覚悟を決めろ」

「うっ・・・」

織斑先生によって一刀両断………一夏、諦めろ。

さらに一夏が無駄な抵抗をしようとすると………

「待ってください！納得がいきませんわ！」

金髪ドリルの甲高い声によって遮られた………そして、金髪ドリルは言葉をつづける。

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしです！そのような屈辱を、一年間通して味わえとおっしゃるのですか？」

……何て言ったこいつ？

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由だけで極東の猿になるのは困ります！私は、サーカスをする気は毛頭ありません」

……こいつ日本のこと馬鹿にしてるのか？

「だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、私にとっては耐えがたい…「イギリスだって大しお国じｍ「否定するわ…」え？」」

金髪ドリルの言葉を一夏が遮り、さらに僕がその声を遮る……少しだけ、我慢するのを止めよう……

「聞こえなかったのか、英国人？僕は否定するって言ったんだよ。分からないならもっと詳しく言おうと？英国人、貴様の発言全てを否定するわ。貴様の国を否定するわ。」

僕の変わりように悠二以外が驚く。悠二は、やっぱりと言う表情になっている。

「なっ・・・！あ、あなた！私の祖国の人々を侮辱する気ですか！？」

金髪ドリルの肩が怒りによって震える…こいつ分からないのか？

「あたりまえだ。まず、貴様は僕達の祖国を侮辱しただろ？」

「それは事実を言ったまででしょう！？」

「なら、僕も事実を言ったまでだよ。それとも？自分で言ったことをすぐ忘れる脳なの？にわたりと一緒だね♪」

金髪ドリルはさらに顔を怒りに染めて……

「あーもう！こうなったら決闘ですわ！」

如何してそんなことになるんだ？……戦闘開始はまだしないが、少し人識の坊やの言葉を借りようかな？

「ああ、良いだろう。貴様のその傲慢な態度……刻んで解して並べて揃えて晒してやるよ。……一夏もそれで良いな？」

「ああ、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

どうやら一夏もやる気十分らしい。さすが、正直（リアリ）だ。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いいえ、奴隷にしますわよ」

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隷でも何にでもなってやるよ！」

「別にいいよ。僕は絶対、貴様みたいなやつに負けないから」

と言った後、僕達三人は睨み合う……

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は次の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、博麗はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

織斑先生の言葉によって授業が再開する…さて、決闘と言っていたが僕が本気だしたら、うっかり殺しちゃうかもしれないからな～後で、悠二に相談しよう。

第弐話～金髪～（後書き）

幽&幸&悠「「「？？？のトークショー！！」」」

幽「始まりました。？？？のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

幸「作者？…？？？って何だ？」

悠「大方、まだ後書きの題名が決まってないんだろ？」

幸「まさか～」

幽「……」

幸「……まじで？」

悠「それで、作者からお願いがあるんだと」

幽「読者の皆さま、お願いがあります。このトークショーの題名を考えてくれませんか？お願いします！！」

幸「僕からもお願いします。」

悠「どうかうちの馬鹿作者を助けてやってくれ。」

幸「それと、ゲストの件ですが、次の後書きにしたいと思います。」

悠「それでは、みなさん」

幸&悠&幽「「「さようなら～」」」

第参話～訪問者～（前書き）

今回は会話文が多いです。

それと、今回は本編にＫ・Ｈ様の名前とＫ・Ｈ様の【幻想とチートと学園？】から龍炎タクト君が来てくれました！！

第参話～訪問者～

金髪ドリルと一夏と僕の三人の代表決定戦が決まった後……

「あ〝～～～～」

やってしまった……

本来ならあまり目立たないでいようと思っていたのに、思いっきり目立ってしまった…ちきしょう…

普通の奴なら、『相手は代表候補生と戦うなんて言ってしまった。』と言うと思うが、僕は違う……てか、僕や悠二の場合【代表候補生】や【国家代表】なんて雑魚に近い……けど、めんどくさい。何がめんどくさいと言うと、【生かした状態】で倒すこと、悠二なら簡単にやるかもしれないけど、僕にとっては結構難しい…はぁ～基本的に僕は【殺人鬼】だ…この体はたくさんの血で汚れてる…相手を殺した方が楽だ…

「幸夜・・・。大丈夫なのか？」

「一応、大丈夫だよ。一夏は？」

「…大丈夫な訳がないだろう」

「そうか……」

「「はぁ・・・」」

「溜息するぐらいなら、決闘なんか受けるなよ…」

悠二が呆れたように言う……だって、金髪ドリルが日本のことを馬鹿にしたんだもん…

「あ、織斑君、博麗君、鳴海君。まだ教室に居たんですね。よかった～」

声が聞こえた方を見てみると、山田先生がいた

「あ、山田先生。どうしました？」

「えっとですね・・・寮の部屋が決まりました」

そういって番号の書かれたキーを僕と悠二と一夏の三人にくれる山田先生。…あれ？確か僕達って……

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったですか？前に聞いた時に、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」

「俺も、そう聞きましたけど。」

「以下同文」

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。・・・・三人とも、そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

どうやら政府……日本政府の指示らしいな。妥当な案だろう、

なんせ前例のない『男』のＩＳ操縦者なのだ、国としても監視と保護の両方を兼ねているんだろう。

「そう言うわけで政府特権もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば三人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「そうですか、部屋の件はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「僕達も一度、荷物を取りに帰っていいですか？」

「あ、いえ、二人の荷物なら・・・・」

「私が手配しておいたやった。ありがたく思え」

と、織斑先生の声が聞こえた……あれ？どうして、ダースベーダーの曲が聞こえたんだろう？

「あ、ありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな、それと、鳴海と博麗の荷物は【龍炎（りゅうえん）タクト】と言う人物が持ってきて、外で待っているらしい。取りに行ってやれ。」

「「タクト（君）が？！」」

僕と悠二は織斑先生の口から出てきた名前に驚く……どうして、タクト君がこの【世界】に？

「なら、僕が取りに行きます。（悠二、如何思う？）」

「分かった。（さあな？とりあえず行って来い。その時聞けばいいだろ？）」

僕と悠二は会話をしながら、念話をする。

「あと、博麗君と鳴海君は一緒の部屋ですからね。じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。部屋には個別にシャワーがあるので、当面はそちらをつかってください」

「そちらってことは、他にもあるんですか？」

「はい、大浴場がありますが、三人は今は使えません」

「え、何でですか」

・・・一夏、キミは本当に正直（リアリ）だよ。

「一夏は、同年代の見知らぬ女子大勢と一緒に風呂に入りたいの？」

僕と悠二の場合、同世代じゃないけど…

「あ・・・」

「お、織斑君は女子とお風呂に入りたいんですか！？　だっ、ダメですよ」

「いえはいりたくないです」

一夏は気づいたように呟き、山田先生が慌て始め、そんな山田先生に対して一夏が即答する…まさか？！

「ん？どうしたんだ二人とも？」

「「いや、ナンデモナイヨ～」」

僕と悠二が自分のお尻を守るように手を当てて、一夏から少し離れる。

で、そんな会話が伝播したのか、廊下の女子は腐女ｓ・・・ゲフン！ゲフン！『婦女子談義』が始まっていた

『織斑君・・・男にしか興味ないのかしら？』

『それはそれで・・・いいわね』

『「幸夜、俺もう・・・」「こんなところでダメだよ・・・」　あぁっ・・・』

『悠二×幸夜』

『「フフフ、行くぜ幸夜？」「ゆ、悠二ぃ～」』

『『『『有りね！！』』』』』

「「有りじゃねえよ！！」」

僕と悠二の声が綺麗に重なる。一夏はどうか知らないけど、僕達は

ノンケだ！

「俺もノンケだよっ！　まだそういうのに興味がないだけで」

「「……」」

「おい？！二人ともどうして俺からさらに離れるんだ！！？」

とりあえず、荷物を取りに行くか……

～～～

僕は荷物を取りに行く為に、ＩＳ学園の外にある町の外れに行くと、そこには、身長が１８５ｃｍで、顔は中性型、目も髪も黒色と純和風の少年がトランクケースを持って立っていた…

「久しぶりだな、幸夜」

「久しぶり、タクト君」

僕とタクト君は挨拶を交わす……

「荷物を持ってきてくれてありがとう。でも、どうしてタクト君がこの【世界】に？」

「ああ、それはな、Ｋ・Ｈに頼まれたんだよ」

「K・H様に？」

「ああ、とりあえずアタッシュケースの中身見てみろ。」

「分かった……って、うわっ？！」

僕はタクト君に言われたとおりに、中身を見ると何かが僕に跳びついて来る……って？！

「これって、【アルト】の【プライミッツ・マーダー】じゃないか？！」

僕の目の前で尻尾を振っている、小型犬…本当ならもっと大きいはずだが…プライミッツ・マーダー…人類殺しが立っていた。

「ああ、そいつはK・Hが創った聖遺物だ。」

「聖遺物？！って、どうやって、創ったの？！」

「K・Hが暇つぶしにトリマーまがいのやってたら、プライミッツ連れたアルトルルージュが来たから洗ってるときに二、三本の抜け毛を拝借したらしいぞ。」

「……ほんと、K・H様には驚かされるよ。」

ほんと規格外だよね、K・H様は……

「それと、その中にはISの専用武器とか、プログラムが入ってるからな。」

「ありがとう。」

「別に良いって、それじゃあ、帰るわ。幸夜、【スキマ】お願いできるか？」

「うん、良いよ。」

僕はタクト君の背後に親譲りの【スキマ】を開き、その中に、タクト君が入ったのを確認して、スキマを閉じる……さて…

「いい加減、出てきたらどうだい？」

僕の呼びかけに後ろから、普通の人ではありえない、髪の色や、瞳の色をした人間が出てきた……

「【転生者】か？どうせ、【世界の意思】から僕と悠二を殺せって言ってきたんだろ？」

僕の問いに、二人の【転生者】は無言で、何処からか黒と白の夫婦剣【干将（かんしょう）・莫耶（ばくや）】を取り出し、構える。

「それが，答えか……」

ドン！

「「ッ？！」」

二人の転生者が地面に突き刺さった僕の愛用の武器……『大量殺（オーバーキル）戮祭（パレード）』を見て驚く、『大量殺戮祭（オーバーキルパレード）』は長さが三メートルを超し、横

幅も広い大剣で、刃の淵には首を狩るためだけにある穴が付いているからだ……

僕は『大量殺戮祭(オーバーキルパレード)』を片手で持ち……

「形成(イェツラー)　冷酷になった女王の銃(エリザベス・ゲヴェーア)!!」

Ｙｅｔｚｉｒａｈ――　Ｅｌｉｚａｂｅｔｈ　Ｇｅｗｅｈｒ

僕の片手に冷気が集まっていき、禍々しい雰囲気を持った装飾銃が出現する。

「アハハハハハハハ!!!!!!!!!!」

僕の気分が高揚して、博麗幸夜と言う【化け物】から零崎紅識(れいざきこうしき)と言う【殺人鬼】に変わるのが分かる…

「では!【殺人】と言う【恐怖劇(グランギニョル)】を始めよう…さあ、零崎を開催しよう!!!!」

さあ、目の前の【獲物】を殺そう!!!!!!!!!!

第参話～訪問者～（後書き）

幽&幸&悠「「「？？？のトークショー！！」」」

幽「始まりました。？？？のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

幸「まだ、？？？なのか…」

幽「そうだな…まあ、気を取り直して…なんと、今回は？？？トークショー初のゲストが来てくれてるんだ！！」

悠「なんだって？！」

幽「それじゃあ、幸夜！！」

幸「了解…今回は【息抜きカオス雑談！】から風見大介君とそのデバイス、ライダーさんと大介君の分身さんが来てくれました！！」

大&分&ラ「「［こんにちわ～］」」

幸&悠&幽「「「こんにちわ～」」」

幸「さて、今日は一体何をやるんだ？」

幽「今回か？今回は俺の質問に答えてもらう！！」

大「質問？」

幽「そう、質問！質問の方はこちら！！」

【幸夜と悠二と大介君達どっちが強い？】

幽「d「大介君達。」幸夜、即答？！」

幸「うん、悠二は分からないけど。たぶん僕と大介君が戦ったら、引き分けか、僕の負けだと思うよ。」

ラ［どうしてそう思うんですか？］

幸「それはねライダーさん……【相手を生かす勝負】だかだよ。」

幽「それって一体どういうことだ？」

幸「僕は【殺人鬼】だよ。人を【殺すこと】には特化してるけど、人を生かすことは難しいんだよ。」

分「そうなんですか……」

幽「じゃあ、悠二と大介君達の場合は？」

悠「それは…失礼かもしれないけど、俺じゃないかな？ほら、俺の能力【相手の能力を強制略奪】するし……う～ん、だけど……」

幽「とりあえず、今回はここで終了しよう。」

大「そうだな。」

幽「それと、読者の皆さま、お願いがあります。このトークショーの題名を考えてくれませんか？お願いします！！」

大「俺からもお願いするぜ。」

幸「それじゃあ、大介君達にＣ４爆弾と龍騎ライダーズのカードデッキ（オーディン）除くをプレゼント！！」

悠「それでは、みなさん」

幸＆悠＆幽＆大＆分＆ラ「「「「「「［さようなら～］」」」」」」

第四話～青騎士～（前書き）

今回も会話文が多く、急展開です。

第四話～青騎士～

幸夜がタクトの所に荷物を取りに言っている間、俺は寮にある俺と幸夜の部屋でくつろいでいる。

先程、隣の部屋から、一夏と篠ノ之の声が聞こえてきたが……一夏、何をやってんだ？

「さてと、そろそろかな？」

俺の言葉と同時に空間が裂け、そこから無数の眼が見える空間……【スキマ】が開かれ、【スキマ】の中から、大きいアタッシュケースを持った、全身【血塗れ】の幸夜が……って、血塗れ？！

「こ、幸夜？！お前、如何してそんな血塗れに？！」

「転生者…」

幸夜の言葉に俺はどうして幸夜が血塗れなのか納得する。

「お前、【零崎】になったろ」

「ＹＥＳ！！」

幸夜が満面の笑顔で言う……ハァ～

「ハァ～……とりあえずシャワー浴びてこい。荷物の確認はそのあとだ」

「了解〜」

幸夜がバスタオルと部屋着を持って、シャワールームの方に向かう……

〜ｓｉｄｅｏｕｔ〜

〜ｓｉｄｅ幸夜〜

「ふぅ〜さっぱりした〜」

僕は濡れた髪をタオルで拭く。え？シャワーを浴びてるシーンはどうしたって？野郎のシャワーシーンは見なくて良いでしょう？さて、タクト君が持ってきてくれた荷物を確認しようかな？

「幸夜、荷物を見るぞ。」

「分かった〜」

悠二がアタッシュケースの中身を取り出していくと、アタッシュケースの中から、人形製作用の道具、悠二専用の武器、地裂灰燼（スーサイダルファング）、断絶劇場（ダムノイローゼ）、ＩＳのプログラムが出てきた。

「悠二、それだけ？」

「ああ…うん？待て、奥に何かあるぞ。」

悠二がアタッシュケースの奥に手を入れて、引き出し、悠二が取り出したのは……

「エターナル？！」

「ハーツ？！」

［お久しぶりです。マスター］

［久しぶり。マイスター］

悠二が取りだしたのは、青い宝石が付いている指輪と赤いスプレー缶……【あの時】壊れたはずの、僕の相機（デバイス）【エターナル・ゼロ】と悠二の相機（デバイス）【トライアングルハーツ】だった。

「エターナル…どうして？」

「ハーツもだ…お前ら、【あの時】壊れたはずだろ？」

［はい。それは、マスターの母である【八雲紫】様が私たちを直して下さったのです。］

か、母さんが？…まあ、母さんがどうして直したか分からないけど…

「エターナル、また会えても嬉しよ」

「俺もだ、ハーツ」

どうやら悠二も僕と同じ気持らしい…

［私達もです。マスター］

［これからもよろしくお願いしますよ。マイスター］

「「ああ、よろしく。」」

僕はエターナルを右手の人差指に嵌め、悠二はトライアングルハーツを懐に仕舞う。

「さて、あとはこのＩＳのプログラムと武装を組み込むだけだな。」

「そうだね。」

「幸夜、じゃあ、お願い。」

「了解～空間製作（エリアワークス）、創造開始（クリエイト・オン）」

僕はこの部屋を【創造と終焉を司る程度の能力】で、ＩＳを整備できる空間に変え、いろいろな機材を創る。ちなみに、他の人には見られないように、認識阻害はしてある。

〜〜〜

ＩＳの整備が終わった後、僕達は眠ろうとベットの中に入ろうとしていた……

ちなみに、現在の時刻は２４：００……うん、結構時間が経ってしまった。

そして、僕達が眠ろうとした瞬間……

［マスター！！ホラーの気配です！！］

［マイスター！！堕天使の気配です！！］

エターナルと、トライアングルハーツの声によって、僕達二人の眠気が吹き飛ぶ。

僕はいつも来ている、黒色のコートを着て悠二は白色のスーツを着る。

「エターナル、トライアングルハート、ホラーと堕天使の位置は分かる？」

［［はい、分かります。］］

「なら、【スキマ】を開くから、そこからの道案内よろしくね。」

僕は、悠二と僕の足元に【スキマ】を開き、ホラーと堕天使がいる所に向かう。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ悠二～

「よっと。」

俺は幸夜の【スキマ】から出ると、何処かの廃屋にだった。

「ハーツ、堕天使の場所は？」

［此処を暫く前に進んだところです。進んでみましょう。］

「了解…」

俺は気持ちを引き締めて前に進む…

堕天使…それは、天界に住んでいる天使が【欲】をだし、堕ちた存在…

グチョ、グチョ

俺の耳に何かの咀嚼音が聞こえ、そこを見ると、黒い翼にひび割れた皮膚、所々から血が出ている生物…【堕天使】がいた。

ゴトッ

何かが落ちる音が聞こえ、そこを見ると、顔がグチャグチャで性別が判断できないが、【人間】の頭が落ちていた……

こいつ、人間を食っていたのか…

俺は、懐からハーツを取り出し……

「松岡ＳＨＵ～造…」

［セットアップ］

俺の服が白いスーツから、赤い着物に灰色の袴姿になり、手にはレイジングハートのエクシードモードと同じ槍型で、刃は赤色…【ブラストフォーム】になる。

「非殺傷設定解除」

［非殺傷設定解除］

ハーツを持つ手に力を入れ………

「Ｆｉｒｅ！」

数十発の赤色の魔力弾が食事中の堕天使に直撃し、堕天使の肉が抉れる。

「■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！！！！！！！！！」

食事の邪魔をされたか、攻撃をされたからか分からないが、堕天使が声にならない声をあげ、俺の方に向かってくる。

「ハーツ、【マツオカフォーム】」

「マツオカフォーム」

槍型の【ブラストフォーム】から赤色の日本刀の【マツオカフォーム】に変わり、俺は一度眼をつぶり、眼を開くと、さっきまでは見えなかった【点と線】が見えるようになる。

「………Ａｍｅｎ（エイメン）」

「■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！！！！！！！！！」

堕天使が叫びながら突進してくるが、俺はそれを避け後ろに回り込み、堕天使の体にもある、【点と線】の点をハーツで刺すと、堕天使の体は簡単に、絶命した。

…俺が使ったのは、【転生者】から【他者の能力を強制的に剥奪す

る程度の能力】で奪った【直死の魔眼】だ。

【直死の魔眼】は、ものが内包する【死】を視覚情報として捉える事のできる魔眼で、これで見える線は、モノの死にやすい部分で、線に沿って切る事によってその個所を死に至らしめる事ができ、本体の生死いかんによらず動く事も治癒・再生も不可能にすることができ、点の方は、モノの死そのもので、突くとその本体は死ぬ。

この能力で俺は堕天使を殺した……さて、後はここの後始末をするだけだ……

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ幸夜～

僕が【スキマ】から出ると、そこは、森だった。

僕は腰に付けてある、ホラーを狩る為だけの武器、銃に剣が付いたような武器…【魔戒剣銃】を取り出し、構える。

ホラー…それは、僕が知ってる【魔界】とは違う【魔界】呼ばれる世界の住人で、古代から【魔戒騎士】と戦ってきた、森羅万象あらゆるものに存在する闇…“陰我”に寄生する怪物…こいつらは、いろいろな物に寄生して、人間を喰らう。

「エターナル、今回のホラーは何？」

［今回は森ですから、たぶん、ホラー【ナチュラル】だと思います。森の陰我から出現して、木などに寄生して、近づいてきた人間を喰らうホラーです。］

「そうか…」

僕が魔戒剣銃を持ちながら、辺りを警戒していると…

「キシャァァァァ！！！！！！！！！！！！！」

「チッ？！」

上から奇声をあげながら【何か】が落ちてくるので、僕はそれを後ろに跳ぶことで避ける。

そして、僕がさっきまでいた場所には蓑虫のように【落葉】や【木

の枝】を体の周りに付いた、人型の生物がいた。

「エターナル？」

［はい。あれが、ホラー　ナチュラルです。］

エターナルが言った言葉に、僕は気を引き締める。そして、ナチュラルの足元に人間が着ていたであろう服が落ちている。

「“貴様……何をしに此処へ来た。餌になりに来たのか”」

ナチュラルが人では聞き取れないであろう言葉でしゃべる。

「僕は餌になりに来たわけじゃない…お前を狩りに来た。」

僕はナチュラルに魔界剣銃を見せる。

「“それは？！……そうか、貴様が最近噂になっている【青騎士】か？”」

「ああ、そうだ。」

「“そうか……ならば！”」

ナチュラルが後ろに跳び、着地すると、ナチュラルの体の周りについていた、落葉や木の枝が剥がれ、悪魔のような顔で、体の肉が丸見えの生物になる。

「“ハハハ！これで貴様は終わりだ！！”」

ナチュラルが捨てた、葉と枝が合体し、巨大な槍になり僕を貫こうと向かってくるが、僕は魔戒剣銃の引き金を引き、槍を破壊する。

［マスター？］

「分かってるよ。エターナル」

僕は、魔戒剣銃を空に掲げ、魔戒銃剣についている、剣で円を描くようにして回し、その円の中心に向かって引き金を引き、そのまま魔戒剣銃を勢いよく振り下ろすと同時に、空中で描かれた円から眩い光があふれ出す。

そして瞬きするかどうかの刹那、魔戒剣銃はさっき持っていた時よりも大きく色も青色に変わり、僕の体は青色に輝く鎧と、狼を模ったようなフルフェイスのマスクに覆われ、僕は【青騎士・青狼（セイロ）】に変わる。

「貴様の陰我、僕が断ち切る！！」

僕は地面を蹴り、ナチュラルとの距離を一気に詰め、上空に蹴り飛ばし、僕も上の方に跳躍して、魔戒剣銃の引き金を連続で引きながら近づいていき…

「破ッ！！」

「“ガァァァァァ”！！！！！！！！！！！！」

魔戒剣銃についている刃でナチュラルを斬り裂く。

切り裂かれたナチュラルの体は、火花を散らしながら消滅する。

［マスター］

「どうした、エターナル？」

「もう、明け方です。」

「…え？」

エターナルの言った言葉に僕は辺りを見渡すと、……

「本当だ、日が昇ってるや」

僕、結局一睡も出来なかった……

第四話～青騎士～（後書き）

幽&幸&悠「「「？？？のトークショー！！」」」

幽「始まりました。？？？のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

幸「まだ、？？？なのか…」

幽「幸夜、違うぞ…違うぞ！！」

悠「何が違うんだ？」

幽「なんと！！このトークショーの名前が決まったんだ！！」

幸&悠「「本当か？！」」

幽「ああ！今から言う題名は夜神様が考えてくれた。」

幸「夜神様、ありがとうございました！！」

幽「それじゃあ、発表です！！」

悠「トークショーの題名は！！」

【紅（くれない）　幸二（こうじ）のトークショー！】

幽「です！」

幸「紅　幸二のトークショー？」

悠「ああ由来が…」

紅　幽鹿から『紅』の一字
博麗　幸夜から『幸』の一字
鳴海　悠二から『二』の一字

～説明～

基本、紅　幽鹿を司会に幸夜と悠二の三人で進行していくので
三人の名前を合わせたコーナー名

悠「だ、そうだ。」

幽「夜神様、ほんとうにありがとうございました！！」

悠「それじゃあ今回の紅　幸二のトークショーは終了だ。みなさん！」

幸&悠&幽「「「さようなら～」」」

第伍話～白式～

入学式翌日の朝、僕と悠二は結局一睡も出来ずに朝を迎えた。

「ちくしょう、俺の貴重な睡眠時間が！！」

悠二その気持ちは分かるけど、部屋で暴れるのはやめようよ。

「悠二、僕は一刻も早く食堂に行きたいんだけど？」

さっきから、お腹が空いてしょうがない。

「ああ、分かった。それじゃあ、行こうぜ！」

僕と悠二は部屋から出て、食堂の方に向かう。

向かう途中、『誰、あの美人なひと？』とか『リアル男の娘』とか言われてたけど……気にしてないんだからね（泣）！！

と、こんなことをしているうちに食堂に着いたわけだが……

「こ、幸夜…お前そんなに喰うのか？」

「当然だ」

悠二が、僕が食べようとしている食事の量に驚いている。ちなみに、僕が頼んだものは、パスタ、ラーメン、パン、カレー、月見そば、それぞれ五人前だ。……一応、これでも量は抑えてるんだよ。

「まあ、いつものことだよな……いただきます」

悠二が呆れたような表情で言って、自分が頼んだメニューである和食セットの、ご飯と納豆、鮭の切り身と味噌汁を食べていく。

「いただきます！！」

さて何から食べようかな～よし！そばから食べよう！！

僕は箸でそばを掴み、食べようとすると……

「おっ、幸夜に悠二じゃないか。隣、良いか？」

悠二と同じ和食セットを持った、一夏と篠ノ之さんが僕達の所に来ていた。

「うん、別にいいよ。」

「わるいな、幸夜、悠二」

一夏と篠ノ之さんが席に座る。そうだ、一応自己紹介しておかないと……

「初めまして篠ノ之さん、僕は博麗幸夜。それで、こっちが…」

「鳴海悠二だ。よろしく篠ノ之」

「ああ、私は篠ノ之箒だ。それと、苗字はあまり好きではないんだ、よろしく頼む。」

篠ノ之さんの言葉に、僕と悠二はやっぱりと思う。
はぁ～篠ノ之の奴、相当嫌われてるぞこれは……
僕と悠二は心の中で溜息をつく。
「ねえねえ、彼らが噂の男子だって～」
「しかも、そのうちの一人は、千冬お姉さまの弟らしいわよ。」
「リアル男の娘…ハァハァ…」
「銀髪の人、かっこいい～」
……何故だろう？今、確実に変質者がいたようだが…気のせいか？
「お、織斑くん、隣いいかなっ？」
「へ？」
気がつくと、一夏の隣に朝食のトレーを持った女子が三人いた。
「ああ、別にいいけど」
一夏がそう言うと、声をかけた女子から安堵のため息を漏らし、後ろにいる二人の女子が小さくガッツポーズをする。おお～箒さんの不機嫌オーラが出ているぞ、一夏。
「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

夜を少なめに？もしかして、健康に良いんだろうか？まあ、僕の場合、夜は今の倍以上は喰うけどね。さてと、

「一夏、僕と悠二はもう食べたから先に教室に行くね。」

「じゃあな、一夏」

僕と悠二はトレーを持ち、食器の片付けに向かった。

〜〜〜

今は二時間目の授業後の放課だ。

さっきの授業では、山田先生の【ブラジャー】発言で授業中、【奇妙な視線】を感じ続けるという奇妙な体験をした。

パアンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

僕が物思いに耽っていると、いつのまにか一夏が織斑先生に叩かれ

ていた。

「（悠二、どうして一夏は叩かれたの？）」

「（それはね、織斑先生の個人情報をバラそうとしたからだよ～）」

「（そーなのか）」

「（そーなのだ）」

悠二と念話で話してると……

パアンッ！

「危なッ？！」

「ちょっ？！」

織斑先生の出席簿アタックが僕達に放たれ、僕と悠二はそれを避ける…出席簿、僕達に当たる前に音が鳴ってたよ？！って、そんなことじゃなくって…

「「織斑先生！どうして僕（俺）達は叩かれそうになったのでしょうか！？」」

「何か失礼なことを考えていただろう？」

「「イイエ、ソンナコトアリマセン」」

織斑先生にはさとりさんと同じ【心を読む程度の能力】を持ってい

るのだろうか？

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を準備するそうだ」

「？？？」

織斑先生の言葉に、疑問の表情になる一夏…一夏のやつ、【専用機】のこと絶対知らないな。

［（マスター、マスター）］

「（うん？どうしたの、エターナル？）」

［（マスター？専用機って何ですか？）］

…此処にもいたよ、専用機を知らない人が…あれ？エターナルは人じゃないから…知らないデバイス？

「（まず簡単に言うとね。１、ＩＳは世界に４７６機しか存在しない。２、コアは篠ノ之博士以外作れない。博士はコアをもう作っていない。…つまり、専用機って言うのは国家や企業に所属する人間しか与えられないんだよ。）」

［（それじゃあ、マスター？織斑さんは、実験体（モルモット）なんですね）］

…エターナル、結構きついこと言うんだね。

「幸夜、幸夜」

エターナルと念話で会話していると、悠二が話しかけてきた。

「何？悠二」

「一夏達、何処かに行っちまったぜ」

「え？」

悠二の言葉を聞き、僕は周りを見渡すと、一夏と、箒さんが消えていた…

～～～～～

今日は代表決定戦の日だ。

……うん？時間が飛び過ぎてるって、細かいことは気にしちゃいけないよ。

と、色々あって僕と悠二、一夏と箒さんはピットの中にいる。

「――なあ、箒」
「なんだ、一夏」
「何、一夏？」
一夏の言葉に箒さんが答える。
「気のせいかもしれないんだが」
「そうか。気のせいだろう」
「ＩＳのことを教えてくれるはなしはどうなったんだ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「目　を　そ　ら　す　な」
一夏の疑問に箒さんが無言で眼を逸らし、一夏がそれをツッコム。
確か一夏はこの日が来るまで、ＩＳの訓練は一切しず、箒さんと一緒に剣道をやっていたそうだ。
「し、仕方ないがないだろう。お前のＩＳもなかったのだから」
「まあ、そうだけど――じゃない！知識とか基本的なこととか、あっただろ！」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「目　を　そ　ら　す　な　っ」

さっきと同じような行動をする二人。

一夏は政府から専用機が用意されるのだが、そのＩＳはまだ届いていないらしい、今もまだ……てか、さっき悠二にも確認取ってみたけれど、一夏のＩＳって絶対、篠ノ之が用意してるだろうな。しかもアイツのことだ。試合ぎりぎりに来た方が面白いと思ってるんだろう。

「「・・・・・・・・・・・」」

一夏と箒が沈黙すると、山田先生が慌しくピットに入ってきた

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

山田先生、慌てていても名字は三回言わなくっても良いですよ…なんか、怖いですよ。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～～～～～は～～～～～、す～～～～～～は～～～～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

きっと一夏は冗談で言ったであろう言葉で、山田先生は本気で息を止めた。そして、みるみる顔が赤くなる。

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

一夏、絶対止めるタイミングを逃しただけだな。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パアンッ！っと、一夏は叩かれる…痛そう…けど、慧音さんの頭突きの方が痛いと思うがな！！

「千冬姉……」

パァンッ！

一夏がまた叩かれる。

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね。」

酷ッ？！実の弟に死ねって言ったよ、ふと隣を見ると悠二の顔も引き攣っていた。

「そ、そ、それでですね！来ました！織斑君の専用ＩＳ！」

「行こう、一夏」

どうやら、間に合ったらしい。ほんと、悪趣味だな篠ノ之は……

僕達は織斑先生に先導されて、ピット搬入口に向かうと、ゆっくりと防壁扉が開く。するとそこには……

ーーーーそこには、『白』が、いた。

「これが・・・・」

「はい！織斑君の専用ＩＳ『白式』です！」

真っ白のそれ。無機質なそれが、まるで一夏を待っているように…

……【自分の主】を待つようにいた。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がなフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

一夏が白式に背中を預けるように座ると、白式が一夏の体に装着される。

「一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。行ける」

「そうか」

織斑先生のほっとしたような声…けどこれは、僕と悠二ＩＳを装着している一夏しか分からない程のブレだろう…

「一夏・・・・・」

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

さて、僕も一夏に言おうかね。

「一夏」

「何だ、幸夜？」

俺は出来る限りの満面の笑顔で…

「あの金髪ドリルの傲慢な態度へし折ってこい！！」

僕の言葉に一夏が引き攣った表情で

「その笑顔でそれって…けど、へし折ってくるさ！！」

一夏は白式と一緒に飛び立つ…

金髪ドリル…いや、【イギリス代表候補生】セシリア・オルコットとその専用機『ブルー・ティアーズ』が待つ、戦いの場所に……

第伍話～白式～（後書き）

幽&幸&悠「「「紅　幸二のトークショー！！」」」

幽「始まりました。紅　幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

悠「それで作者、今回は何をするんだ？」

幽「そうだな～…って、無いな～」

悠&幸「「無いのかよ？！」」

幽「というわけで、それじゃあ今回の紅　幸二のトークショーは終了です。みなさん！」

幽「さようなら～」

幸&悠「「勝手に終わらすな！！」」

第六話～青い雫～

一夏とセシリアの試合が始まって時間が経った…

一夏は最初の方こそ劣勢だったが、金髪ドリルのブルー・ティアーズに搭載されているビット型の武器『ブルー・ティアーズ』の弱点を見抜き、次々と『ブルー・ティアーズ』を破壊していく。

「はぁぁ……。すごいですねぇ、織斑くん」

ピットにあるリアルタイムモニターを見ている山田先生が息混じりに呟く。…確かに一夏はすごい。ＩＳの起動は二回だけ、しかも戦闘は初めてと思えない健闘ぶりだ……だけど

「あの馬鹿者。浮かれてるな」

「織斑先生、分かるんですか？」

織斑先生の言葉に悠二が反応する。さすが、兄弟と言ったところか？一夏の奴、油断してる。これは、僕と悠二、織斑先生しか気づいてないけど。

そして、織斑先生が悠二の疑問を答えるように口を開く

「さっきから左手を閉じたり開いたりしてるだろう。あれは、あい

つの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする。」
「へぇ〜……さすが、ご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」
話を聞いていた、山田先生が言う。
「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」
「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」
「……」
山田先生の頭に織斑先生の手が置かれ、ぎりりりりりっ。とヘッドロックが炸裂する。……山田先生、痛そう
「いたたたたたたたたたっ！！」
「私はからかわれるのが嫌いだ」
「はっ、はいっ！わかりましたか！わかりましたから、離し――――あうううっ」
ふと横を見ると、山田先生が騒いでいる中、箒さんが険しい表情でモニターを見る。そして…
ドカァァァァン！！！！！！！！！！
爆発音が聞こえモニターを見ると、一夏の周りに煙が漂っていた。

「一夏っ！」

箒さんが声を上げる…けど

「ハァ～一夏の奴」

「機体に救われたな、馬鹿者め」

悠二と織斑先生の順番で言うと、煙が弾けるように弾き飛ばされる。そしてその中心には、純白の機体があった。

さてと、僕もそろそろ準備しようかな？

～～～～～

今は一夏と金髪ドリルの試合が終わった後で、一夏は、箒さんと織斑先生の説教を受けている。

試合結果？…結果は一夏の負け。理由は、自分のＩＳの武器の特性を把握できていなかったからだ。

「博麗、今度はお前だ。準備をしろ」

一夏の説教が終わった織斑先生と箒さん、そして、何処か疲れている一夏が近づいてくる。

僕は首に掛けてあるＩＳの待機状態の赤い鳥の翼を象ったペンダントを掴み意識を集中して……

「行くよ、ホルス」

次の瞬間、スマートな外観で脚部が長く、カラーは赤と金で、背中に四枚の鳥の翼を象ったウィング型の機動兵装『ウィスプ』が付いている、僕の専用ＩＳ『ホルス』が装着される。

「幸夜、頑張ってこいよ！」

「私も応援してるぞ」

「幸夜、勝てよ！！」

一夏、箒、悠二が僕に応援の言葉を言ってくれる。僕は一夏達に背中を向けたまま……

「一夏、悠二、箒さん、試合は頑張ってくるけど――――　別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

「「「ああ！！」」」

悠二と一夏と箒さんの声が重なる。

僕は三人の応援を受けて、空に飛び上がると、金髪ドリル…否、セシリア・オルコットが『スターライトｍｋ？』を手にした状態で待っていた。

「遅いですわよ！待ちくたびれましたわ！」

そう言うセシリア・オルコットは、先程まであったあのウザったい傲慢な雰囲気は消えていた……一夏のおかげか？

「ああ、遅れてすまない」

僕は素直に謝り、思考を全てを【戦闘】に切り替え、ホルスの装備の一つである日本刀型の電磁式の剣『村正』を『展開』し、正眼で構える。

「セシリア・オルコット」

「な、なんですの？」

「本気で行くぞ！」

「それは此方のセリフですわ！！」

直後、ホルスからの警告音が鳴り、セシリア・オルコットが『スターライトｍｋ？』の引き金を引き、僕の方にレーザが向かってくるが、それを必要最低限の動きで避ける。

「初撃はサービスだ…避けろ！！」

「なっ？！」

セシリア・オルコットが僕の行動を見て驚き、一瞬動きが止まる。
セシリア・オルコットが驚いた原因…それは、僕が『村正』をセシリア・オルコットに向かって投擲したからだ。
セシリア・オルコットは止まっていた体を動かし、『村正』をなんとか避けようとするが、肩に直撃して、セシリア・オルコットのシールドエネルギーが削られる。
「クッ、流石に今のは驚きましたが、これであなたの近接武器はありません！！この勝負貰いましたわ！！」
セシリア・オルコットが四機の『ブルー・ティアーズ』からレーザーが放たれる。無防備な僕に対して、四機での攻撃…確かに良い攻撃だが…
「甘い！！」
「なっ？！」
僕はタクト君から貰った、天下五刀の一本、童子切りを元に作られたＩＳ用近接ブレード『童子切Ｍｋ－？』を『展開』して、レーザーを全て斬り落とす。
「ハッ！」
「同じ攻撃は通用しませんわ！！」
僕は先程と同じように『童子切Ｍｋ－？』をセシリア・オルコット

に向かって投擲するが、セシリア・オルコットは当然のように避ける…だけど…

「きゃぁ？！」

先程投擲した『村正』に『童子切Ｍｋ－？』が当たり、二つの剣はセシリア・オルコットの背中に直撃して、セシリア・オルコットのシールドエネルギーは削って、僕の手元に戻ってくる。

僕は『村正』を肩に『童子切Ｍｋ－？』の切っ先をセシリア・オルコットに向けて…

「行くぞ、【イギリス代表候補生】セシリア・オルコット…これからの戦い、今まで通りだと思うな！！」

「来なさい！！」

セシリア・オルコットが『スターライトｍｋ？』からレーザーを放ち、僕はそれを『村正』と『童子切Ｍｋ－？』で切り裂いていく。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ悠二～

幸夜がセシリア・オルコットと戦闘を始めると、ピット内は俺を除き驚きと言う表情で満ち溢れていた。あの織斑先生も驚いていた…

まあ…それは、しょうがないだろう…なにせ、手に持っていた剣を投擲して、さらにもう一つの剣を投擲、避けられたが、最初から計算していたかのように、避けられた剣がもう一本の剣と当たり、二つともセシリア・オルコットに直撃し、剣が手に戻ったからだろう。

「…箒、幸夜って強いな」

「あ、ああ」

一夏の言葉に箒さんが肯定する。

「鳴海、博麗のことで少し質問があるが良いか？」

「答えれる範囲なら良いですよ。織斑先生」

織斑先生が此方を向き質問してくるので、俺はあらかじめ釘を打っておく……さすがに織斑先生でも聞かないと思うが、一応な…

「私には博麗がさっきから、セシリアよりも二歩三歩と先を言ったような考えをしているように見えるんだが、如何いうことだ？」

…すごいな織斑先生、本当なら戦っている相手にしか分からないと思うが、こちらで見ているだけで当ててしまうのか…まあ、この質問は答えるかな。

「あの幸夜の動きはですね、『思考分割』と『高速思考』です」

「『思考分割』？『高速思考』？」

俺の言葉に一夏が首をかしげ、一夏ほど表に出してはないが、山田先生と箒さんの顔には疑問の表情が浮かんでいる。

「『思考分割』は、思考を仮想的に分割し、複数の思考を同時に行うことで、並列して思考を行うから、例えば思考を３つに分けたとしても、３つあるからといって３倍になるわけではなく、４倍５倍の思考速度にする技能で、『高速思考』は、思考速度を上げる技能です。しかも技能で戦闘を行うと相手は未来視されていると思います。」

「へぇ～凄いですね、博麗君」

「才能ってやつｎ「ハハハハハ！！」い、行き成りどうしたんだよ悠二？！」

「悪い、悪い…まさか、幸夜について【才能】って言葉が出るとは思わなくってな」

俺は一夏の口から出た言葉に笑いが止まらない。

「だってそうだろ？『思考分割』、『高速思考』って言う技能があるんだろう？それは【才能】じゃないのか？」

「あ～違う、違う。一夏、勘違いしてると思うけど、幸夜に才能なんかないぜ」

「へ？」

俺の言葉に一夏が間抜けな声を出す。

「あいつは【あること】以外は、二流なんだよ。あ、一応言っておくが、セシリア・オルコットは仮にも代表候補生だから、一流な…おっと、二流がどうして一流をあんなに圧倒してるんだって言う質問は、無しだ。あえて言うなら、あいつは、【超一流に勝てる努力をしている超二流】ってことだ。」

俺の言葉に一夏や箒さんが質問しようとするが、その質問を言わせる前に俺は答える……あいつ博麗幸夜は、創ることや終焉(こわす)こと、人形作り…そして【人を殺す】こと以外はすべて、二流…だけど、創ることや終焉(こわす)こと、人形作り、人を殺すことは超一流を超える規格外……まあ、規格外で当然か……なにせ、俺と幸夜は……人外(バケモノ)なのだから…

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ幸夜～

「ハァ…ハァ…ハァ」

僕の目の前にいるセシリア・オルコットは息が乱れ、肩で息をしている状態になっている。

僕は時間と自分の残りのシールドエネルギー…まあ、あまり減ってはいないが…僕はセシリア・オルコットにある提案をする。

「セシリア・オルコット、提案があるんだが良いか？」

「提案？言っておきますが、降参はしませんことよ」

「あ～違う違う。僕の提案は、次の一撃で最後にしようと言う提案だよ。」

「如何いうことですの？」

セシリア・オルコットが僕の言葉に疑問をもち、僕の攻撃を警戒しながら聞いてくる。

「言葉通りだ。そろそろ時間も無くなってきているからな。タイムアップになったら、僕の勝ちになるけど、がそれじゃあ僕の後味が良くないし、貴様もタイムアップで負けなんて嫌だろ？だから今使ってる武装の最大の攻撃で決着をつけようと思うんだけど……どうかな？」

僕の言葉にセシリア・オルコットは言葉ではなく、『スターライトmk？』と『ブルー・ティアーズ』を僕に向けることで答える。

「グット！」

セシリア・オルコットの返答に僕の顔が歪んでいるのが分かる。アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！久々だよ！【殺人】や【殺し合い】以外でこんなにも気分が高揚するのは！！！！！

僕は『村正』を『収納』して『童子切Ｍｋ－？』を上段で構える。

「行きますわよ！！」

「来い！！セシリア・オルコット…否、『青星の淑女（ブルースター・レディー）』！！！！」

セシリア・オルコットの『スターライトｍｋ？』と『ブルー・ティアーズ』から同時にレーザーが放たれ、僕は上段に構えている『童子切Ｍｋ－？』に、シールドエネルギーを一定量与え……

「鬼牙絶刀！！！！！！」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！」

『童子切Ｍｋ－？』を振り下ろすと、『童子切Ｍｋ－？』から斬撃が放たれ、セシリア・オルコットが放ったレーザーを斬り裂き、そのまま、セシリア・オルコットに直撃する。

［試合終了。勝者、博麗幸夜］

アナウンスが流れ、僕とセシリア・オルコットの試合は僕の勝利で終わった。

第六話～青い雫～（後書き）

幽&幸&悠「「「紅　幸二のトークショー！！」」」

幽「始まりました。紅　幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

悠「それで作者、今回は何をするんだ？」

幽「今回は、前々回で出た、青騎士・青狼（セイロ）と幸夜が持つ魔導具について説明するぞ！」

幸「では、どうぞ！！」

魔戒剣銃【青牙（セイロ）】：幸夜が使う魔戒剣で、状況に応じて接近戦・遠隔戦に切り替えることができる。

魔導火ライター：魔戒騎士が携行するライター。ライターには魔界の炎である【魔導火】が入ってる。

魔導火：魔戒騎士が持つ火で、指令書の解読　ホラー探知（憑依された人の瞳にかざすと魔導文字が浮かび上がる）　【烈火炎装】のための触媒　傷の治療などの用途があるが、魔導力の修業を受けた者しか扱うことはできず、常人が扱おうとすれば一瞬で焼き尽くされる。

ちなみに幸夜は、指令書の解読で火を使ったことはない。

青狼（セイロ）の鎧：幸夜が纏う、ソウルメタルで造られた鎧

頭上に魔戒剣銃で円を描き、その円の中心に向かって引き金を引く事で召喚が出来、纏う者に絶対の攻撃力と防御力を与える。しかし、鎧を召喚し纏う事ができるのは９９，９秒だけで、それ以上纏うと鎧に喰われる。

鎧の造形は青色に輝く鎧と、狼を模ったようなフルフェイスのマスクで、どこか牙狼に似ている形になっている。

幸「です」

悠「なんか凄いな」

幸「そう？」

幽「さあ？」

悠「まあ、良いか…さて！今日のトークショーはここまで！！」

幸「みなさん！」

幸&悠&幽「「「さようなら～」」」

ＩＳ&デバイス設定（ネタばれ注意）

ＩＳ：ジェフティ

操縦者：鳴海悠二

待機状態：黒く輝く結晶の形を取ったペンダント

ＩＳ形態：Ｉスマートな外観で脚部が長く、カラーは黒を貴重としている

ジェフティは悠二が持っているノートパソコンに何故かＩＳの設計図があり、悠二は暇つぶしに設計図にあった三機ＩＳを造り、その造られた中のうちひとつが、ジェフティである。

固有武装は右腕に装着された実体剣『パドルブレード』、左腕に高出力エネルギーシールド、さらに背部のウィングから一気に１５発の歪曲しながら敵を追尾する高威力レーザー『ホーミングショット』、背部に二基の展開式バーニアを装備しており機動性も高く、さらにインテリジェントデバイスの技術を応用して開発した独立型戦闘支援人工知能『ＡＤＡ（エイダ）』を搭載しており、いかなる状況でも柔軟に対応できる最強クラスのＩＳの名を欲しいままにしている。
ほか、ベクタートラップシステムを用いてさらに副兵装を呼び出し自在に使用することが出来る。

武装：パドルブレード、高出力エネルギーシールド、ホーミングショット

サブウェポン：『ベクターキャノン』大部隊殲滅及び拠点攻撃用の巨大な超高エネルギー砲で、メタトロンの圧縮空間能力を利用した空間破砕が可能で、威力はスターライトブレイカーの約３０万倍。

『ガントレット』腕部から実体弾を発射する。

『コメット』ガード不可能エネルギー弾を三発放つ。対象に命中するまで一定時間飛び回るため、回避も難しい。

『ファランクス』大量の小型エネルギー弾を連射する。拡散させて広範囲に弾幕を張ったり、一点に収束させて攻撃することも可能。

『ハルバード』超強力な一点集中型のレーザーを放つ。

『マミー』全方位からの攻撃を防ぐ巨大な実体シールドを召喚する。その内部で機体を自己修復させることも出来る。

『ホーミングミサイル』追尾性の高いミサイルを一気に２～２０発放つ。

ＩＳ：ホルス

操縦者：博麗幸夜

待機状態：赤い鳥の翼を象ったペンダント

ＩＳ形態：ジェフティを赤と金に塗り替えたような感じで、背中に四枚の鳥の翼を象ったウィング型の機動兵装『ウィスプ』を持っている

ホルスは悠二が造った三機のうち最も後期に開発された機体

固有武装は日本刀型の電磁式の剣『村正』とジェフティと同型のホーミングショット、天下五刀の一本童子切りを元に作られＩＳ用近接ブレードで、シールドエネルギーを一定量与えると斬撃を飛ばし、相手を切り裂く「鬼牙絶刀」が使える『童子切Ｍｋ－？』、さらに世界一つを破壊出来るほどの威力を持つ砲撃『虚無－ウー－』で、もちろんベクタートラップシステムやゼロシフトも使用可能で、幸夜の癖に合わせてチューンナップされているため三機の中では最も性能が高いが、唯一人工知能が搭載されていない。

武装：村正、ホーミングショット、虚無－ウー－、童子切Ｍｋ－？

サブウェポン：『ベクターキャノン』大部隊殲滅及び拠点攻撃用の巨大な超高エネルギー砲で、メタトロンの圧縮空間能力を利用した

空間破砕が可能で、威力はスターライトブレイカーの約３０万倍。

『ガントレット』腕部から実体弾を発射する。

『コメット』ガード不可能エネルギー弾を三発放つ。対象に命中するまで一定時間飛び回るため、回避も難しい。

『ファランクス』大量の小型エネルギー弾を連射する。拡散させて広範囲に弾幕を張ったり、一点に収束させて攻撃することも可能。

『ハルバード』超強力な一点集中型のレーザーを放つ。

『マミー』全方位からの攻撃を防ぐ巨大な実体シールドを召喚する。その内部で機体を自己修復させることも出来る。

『ホーミングミサイル』追尾性の高いミサイルを一気に２～２０発放つ。

デバイス設定

所有者：博麗幸夜

名前：エターナル・ゼロ

愛称：エターナル

ＡＩ：女性

種類：インテリジェントデバイス／ユニゾンデバイス

待機時：青い宝石が付いた指輪

使用時：モード・ツヴァイ【干将・莫邪の刀身を細くして、両方の柄に鎖を繋げた双剣に変わる】

モード・ゲヴェーア【銀色で蒼い線が入っている二丁拳銃に変わる】

バリアジャケット：セイバーオルターの鎧ドレス

エターナルは、幸夜が魔術・魔法を使うときの触媒にもなり、ホラーなどの生物の気配を探知できるシステムがある。性格は結構明るいが、冷静さもある。幸夜の事を【マスター】と呼ぶ。ちなみに、エターナルは人間の姿になり、ユニゾンデバイスとしても使用できる。

所有者：鳴海悠二

名前：トライアングルハーツ

愛称：ハーツ

ＡＩ：女性

種類：インテリジェントデバイス／ユニゾンデバイス

待機時：スプレー缶で、松岡ＳＨＵ～造ってやって起動

使用時：ブラストフォーム【レイハのエクシードモードと同じ槍型で、刃は赤】

マツオカフォーム【日本刀型で、フェイト以上の高速戦闘を得意とする】

バリアジャケット：赤い着物に灰色の袴姿

トライアングルハーツは、悠二が魔術・魔法を使うときの触媒にもなり、生物の気配を探知できるシステムがある。性格は明るく、ハーツがボケ、エターナルがツッコミと言う関係が成り立っている。悠二の事を【マイスター】と呼ぶ。ちなみに、ハーツも人間の姿になり、ユニゾンデバイスとしても使用できる。

第七話～生徒会長～（前書き）

後書きキャラ崩壊、激しいです。

第七話～生徒会長～

突然だが、僕と悠二は生徒会室の前にいる。

何故、こんな所にいるのかと言うと…

僕と金髪ドリルの試合が終わった後、僕は一夏に色々聞かれたが、ある程度はぐらかした状態で話を終え、悠二と一緒に部屋に戻ろうとすると悠二が、【山行こうぜ♪】的なテンションで【生徒会長、殺(や)りに行こうぜ♪】と言ってきたからだ。

この言葉を聞いて、『大量殺戮祭(オーバーキルパレード)』を出したのはしょうがないと思う……だって、殺(や)るという言葉は僕の言葉なのにいいいいいいいい！！！！！！！！

……すみません話がそれました。

「失礼します～」

と、僕が色々考えているうちに悠二が生徒会室に入って行った。おっと、僕も入らなきゃ！！……まあ、今回は僕が闘うわけじゃないし、悠二ｖｓ生徒会長と言う歌劇(たたかい)を楽しむとするかな…

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～side悠二～

「失礼します～」

俺は生徒会室の中に入り、目当ての人物を探す……お、いたいた♪

俺の目当てである人物で、この学校の【生徒会長】である更識楯無（さらしきたてなし）が、驚いた様子で俺達の方を見ていた。

「鳴海悠二くん？と博麗幸夜くん？」

「初めまして、生徒会長の更識楯無さん。それとよく覚えていましたね」

俺は深く腰を折るように礼をしながら言う。

「珍しい男子生徒だからね」

「そりゃそうですね」

楯無の言葉に幸夜が肯定するように言う。すると……

「あ～ナルナルとハクハクだ～」

む、この独特な雰囲気を持つしゃべり方と、幸夜のあだ名が、身した時に【きもけーね】と言う愛称で呼ばれる慧音の種族である【ハクタク】となんか似ているような言い方をする人物は！！

「おひさ～のほほんさん」

「やあ～ハクハク～」

クラスメイトである布仏本音（のほとけ ほんね）が幸夜とハイタッチしていた。まあ…それはさておき…

「生徒会長さん相手してもらえますか？」

「ええ良いわよ。」

「ありがとうございます。」

俺は笑顔でお礼を言い…

グシャ！

生徒会長が転がるように椅子から降りると、椅子が木っ端みじんに破壊される。

「普通、笑顔でお礼を言いながら攻撃する？しかも殺気が少ししかしなかったわよ。」

「そうですか…」

俺は生徒会長を攻撃する時に使った、剣のように見え、ハンマーのようにも見え、太い釘にも見え、鎖で柄と繋がれている歪な武器【地裂灰燼（スーサイダルファング）】を手元に戻す。

「ですが、こんなことで驚かれてちゃいけませんよ生徒会長？俺の後ろにいる博麗幸夜は俺よりも毒気のない笑顔で、殺気も出さずに…そして、息をするように人を殺しますからね…」

「…ホント、凄いわね」

さて、この一撃で仕留められなかったし…

「それでは生徒会長さん、ＩＳで勝負しましょうか」

「ええ良いわ」

俺と生徒会長はアリーナに向かった。

〜〜〜

第五アリーナ

「行くぜ、ジェフティ」

［サーイエッサー］

ＩＳの待機状態から声が聞こえた瞬間、俺の体にスマートな外観で脚部が長く、黒色をメインとしているＩＳが装着される。

生徒会長の方を見ると、生徒会長は専用機『霧纏の淑女（ステリアス・レイディ）』を装着していた。

俺は実体剣『パドルブレード』、生徒会長は蛇腹剣『ラスティー・ネイル』を構える。

「それじゃー」

「れでぃーごー！」

幸夜とのほほんさんの開始の合図と共に、俺は様子見の為、サブウェポンである『ガントレット』から実体弾を腕部から発射する。

生徒会長はその全ての弾を蛇腹剣『ラスティー・ネイル』で弾くか、そのまま機体を動かし避けている…まあ、予想通りか？

「行くわよ！」

「フッ！」

俺の『パドルブレード』と生徒会長の『ラスティー・ネイル』がぶつかり合う。

「こんなに接近して来て良いのか、生徒会長さん？」

「ええ、大丈夫よ」

「そうか…フン！」

「きゃ？！」

俺は生徒会長に蹴りを入れ、生徒会長との距離を離す。

「いた～普通ＩＳ戦で蹴りを使う？」

「俺、非常識の塊なんで」

「あら、そう」

俺は『パドルブレード』を構えた状態で、生徒会長を警戒するが、生徒会長には『ラスティー・ネイル』で攻撃する意思が見えない…何故だ？

［マスター、マスター周辺の空間に異常が］

「何っ？！」

俺のＩＳに搭載されている独立型戦闘支援人工知能『ＡＤＡ（エイダ）』から警告が鳴り、俺はそこから脱出しようとするが……

「クリア・パッション！」

俺の周りの空間の温度が一気に上昇し、衝撃や熱が俺に襲いかかってくる…だが

「シールドエネルギーがあまり減ってない！？」

「あぶね～助かったぜ『ＡＤＡ（エイダ）』」

［いえいえ、これは当然の行動ですよ］

俺は『ＡＤＡ（エイダ）』の冷静な判断のおかげ、さっきの攻撃をあまりダメージを受けずにやり過ごすことが出来た。

「今度は俺のターンだ！！」

俺の背部のウィングから一気に１５発の歪曲しながら敵を追尾する高威力レーザー『ホーミングショット』を発射し、生徒会長は『ホーミングショット』を水のヴェールで防御する。

「甘い、それはフェイクだ」

「きゃ？！」

俺は生徒会長が攻撃を防いでいる間に背後に忍び寄り『パドルブレード』で斬りつけて、シールドエネルギーを減らし、後ろに飛ぶことで、距離を開ける。

「さあ来いよ。生徒会長」

人差し指をクイクイと曲げて、挑発する。

「上等！」

生徒会長は水を螺旋状に纏ったランス『蒼流旋（そうりゅうせん）』を『展開』する。

「ハァ！」

「チッ！」

『蒼流旋（そうりゅうせん）』の攻撃を『パドルブレード』で受け止めようとするのを止め、左腕の『高出力エネルギーシールド』で防ぐ

「『ＡＤＡ（エイダ）』！！」

［ファランクスを発動します］

ＩＳから大量の小型エネルギー弾を連射し、それを全て拡散させて広範囲に弾幕を張ることで、生徒会長と俺との距離を離す。

「『ＡＤＡ（エイダ）』コメットだ！」

［了解］

俺はエネルギー弾を三発放つ。

「これぐらい！！」

生徒会長が水のヴェールで防ごうとするが…

「そんな？！きゃぁぁぁぁ！！！！！！」

俺が放った三つのエネルギー弾は水のヴェールを貫通し、生徒会長に直撃する。

流石この学校の生徒会長だな…ほとんどのサブウェポンを使っても倒れないのか…なら！

「生徒会長これでも喰らってな！！『ハルバード』！！！」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

俺は超強力な一点集中型のレーザーを放ち、レーザーは生徒会長に直撃する

「勝者、ナルナル」

のほほんさんの終了の合図と共に、シールドエネルギーが切れたと生徒会長のＩＳは解除され、そのまま落下していく…って？！

「『ＡＤＡ（エイダ）』！！」

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）」

俺は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で加速し、地面に直撃する寸前で生徒会長を受け止める。

「大丈夫か？」

念の為聞いておかないとな…うん？どうして、生徒会長の顔が赤いんだ？

「だ、大丈夫よ／／／／」

「そうか、それは良かった」

「それじゃあ後はよろしくね、新生徒会長さん」

生徒会長がそんなことを言う…あ、勝ったら生徒会長なんだっけ？

「要らねえよ。生徒会長の席なんて」

「だったらなんで挑んだの！？」

俺の言葉に生徒会長が驚いた顔で聞いてくる。

「まあ、ある程度のお願いを聞いて欲しいだけですよ」

さて……後は、何故かケータイ電話を持ってニヤニヤしている幸夜を〆るだけか…

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～side幸夜～

悠二が生徒会長を倒した翌朝のSHR……あ、ちなみに昨日悠二が僕に対して、O☆HA☆NA☆SHIしそうになったから、僕は正直にケータイを見せ、それを見た悠二はorz状態になった。理由は…

宛先：永琳さん

件名：奥さん悠二の愛の逃避行ですよ。

ファイル添付：悠二が顔が真っ赤な生徒会長をお姫様だっこしている写真

本文：悠二君が浮気しました。

のメールを見たからだ。

そして、その直後…

宛先：幸夜君

件名：今回の件について

ファイル添付：永琳さんが怪しい薬を持ち、その後ろで鈴仙(れいせん)が拘束され暴れている写真

本文：悠二のせいで哀れな犠牲者が出ました。それと悠二、帰って

きたら≪自主規制≫するわよ……

この文と写真を見た瞬間、僕と悠二は鈴仙(れいせん)に黙祷した。

そして悠二は、永琳に≪自主規制≫される？悠二それは嫌だと考えてるから嫌な気分になるんだ。逆に考えるんだ、≪自主規制≫されても良いんだ、と考えるんだ。……と、言っていた…ごめん悠二

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

と、こんなことを考えているうちに、山田先生がクラス代表を発表していた。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？普通、昨日勝った幸夜が代表になるんじゃないんですか？」

「それは――――」

「それはわたくし（僕）が辞退したから。（ですわ！）」

山田先生の言葉を遮り、僕とセシリア・オルコットの声が重なる。

そしてセシリア・オルコットの物凄く長い喋り…てか、セシリア・オルコットと箒さんの反応を見て分かったが、二人は一夏に恋をし

ていて、一夏はそれに気づいていないことが分かった。う～ん、青春だね～

あ、ちなみに僕は、「敗者は勝者に従え」と言っておいた。そしたら一夏が、ｏｒｚ状態になった。

「クラス代表は織斑一夏、依存はないな。」

「「「「「「「「「「「「はーーーーい！」」」」」」」」」」」」

こうして、ＳＨＲは終わったのであった。

第七話～生徒会長～（後書き）

幽&幸&悠「「「紅　幸二のトークショー！！」」」

幽「始まりました。紅　幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

幽「悠二…ケッ！」

幸「ケッ！」

悠「いきなり何だ？！…よし、幸夜そのケータイをこちらに渡してもらおうか？」

幸「チッ！」

幽「悠二、いきなりフラグ立てたな」

悠「立ててねえよ！！それより幸夜、お前のせいで俺、幻想郷から帰ったら大変なことになるぞ！！」

？？？「大変なことって？」

悠「それは永琳に≪自主規制≫されたり、三日三晩≪自主規制≫だったり、薬を飲まされ≪自主規制≫だったｒ…（ガシッ！）…へ？」

？？？「久しぶりね。ゆ・う・じ♪」

悠「え、永琳…どうしてここに？しかもまだ本編には名前しか出てないのに…」

永「それはね」

幽「作者権限だ」

悠「作者ァァァァァ！！！！！！！！」

永「それじゃあ行きましょう。悠二…／／／／／／／（ポッ）」

悠「あれ？普通に可愛いと思うのに恐怖を感じるのはなぜ？あれ、永琳さん？どうして肉食獣の目をしてるんですか？涎をたらさないで！！い、イヤァァァァァ！！！！！！！！」

悠二はログアウトしました。

幸「…悠二…ところで作者、これからも後書きに東方キャラ出すの？」

幽「おう、ＩＳキャラもだぜ！まあ、ちょくちょくだがな」

幸「そうか……さて！今日のトークショーはここまで！！」

幽「みなさん！」

幸＆幽「「「さようなら～」」」

第蜂話～中国人～（前書き）

誤字・脱字あるかもしれません。

第蜂話～中国人～

現在は四月下旬、僕達がＩＳ学園に来て結構な時間が経ち、僕達のクラスは飛行訓練の為にアリーナに来て整列していた。目の前にはジャージ姿の織斑先生が立っている。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。博麗、鳴海、織斑、オルコット、ためしに飛んでみろ」

僕はいつものようにペンダントを掴み、意識を集中させる。

「（行こう、ホルス）」

僕の体にホルスが装着され、悠二、セシリア、一夏も既にＩＳを装着していた…ちなみに、僕はセシリア・オルコットをセシリアと呼ぶようになったかと言うと、あっちが僕達に対してやってきた態度を謝り、自分のことはセシリアと呼んでくれと言ってきたからだ。あ、僕もちゃんと謝ったからね。

「よし、飛べ」

織斑先生の合図と共に僕と悠二、セシリア、一夏は同時に飛ぶ。ＩＳの飛ぶときのイメージは『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』らしいが、僕のイメージは『羽を生やして空を飛ぶイメージ』だ。…実際、羽根生やせるし、僕…

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

一夏が織斑先生にお叱りを受ける。織斑先生は身内に厳しいのかな？

そして、セシリアが一夏と楽しそうに喋る。

「（なあなあ、幸夜）」

「（なあに？悠二）」

「（青春だね～）」

「（そうだね～）」

悠二の言葉に僕も同意する。ちなみにこの会話はＩＳの記録に残らない念話で行っています。

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く下りてこい！」

と、そんな事をしていると地上にいる箒さんが山田先生のマイクを奪って叫ぶ……何をやってるんだ箒さん？！織斑先生の出席簿の生贄なるだけじゃないか！！ちなみに、この望遠鏡並みの視力はハイパーセンサーによる補正だ。……まあ、僕と悠二の場合はＩＳのハイパーセンサーの補正無しでもこれ位は余裕で見えるけどね…

「ちなみに、これでも機能制限がかかってるんでしてよ。元々ＩＳは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当り前ですわ」

さすが優等生。よく勉強をしてるなぁ。

「織斑、オルコット、博麗、鳴海、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上十センチだ」

「了解です。ではみなさん、お先に」

そう言って、セシリアは地上に向かって急降下していき、完全停止も難なく成功する。一夏の方を見るとセシリアのことを感心しながら見ている。

「それじゃあ、俺も行くわ」

「僕も～」

僕と悠二も急降下していく。ちなみにこの時の僕のイメージは『ただ落下していくイメージ』だ…てか、これしか思いつかん。悠二も同じだろう。

そして、地上１０ｃｍに来た所で『人形が糸で引っ張られるイメージ』で急停止する。ふと、横を見ると悠二も余裕で完全停止をしていた。

「いってぇ・・・」
「さすがだな。次、織斑」

ズドォォォォン！！！！！！！！！！！

織斑先生の合図と共に一夏が急降下してくる…そして

それは専門用語で墜落と言う…

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「すみません」

織斑先生の厳しい言葉に一夏は謝る。

そして一夏を巡って箒さんとセシリアが火花を散らして揉めていたが、織斑先生の一喝で収まる。

「織斑、武装を展開しろ。それぐらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はいっ」

一夏は返事をして突き出した右腕を左手で握る

そして・・・光が手の中から放出され、像を結び『雪片弐型(ゆきひらにがた)』が一夏の手の中に出現する。

「遅い。0．5秒で出せるようになれ」

織斑先生やっぱり身内に厳しいなぁ

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏のように光の

奔流を放出することはなく、一瞬爆発的に光り、それだけでその手には狙撃銃『スターライトｍｋ?』が握られ、しかもすでに銃器にマガジンが接続されており、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。この間わずか1秒足らずだ…しかし

「さすがだな、代表候補生。・・・・ただし、そのポーズは止めろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

織斑先生の言う通りだ、銃とは標準を合せ引き金を引く…この動作の時間が長いのは致命的だ。だから、銃を出す時は銃口を相手に向け標準を合せておけば、後は引き金を引くだけだ。そこら辺が甘いな、代表候補生は…

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な・・・・」

「直せ。いいな」

「……はい」

織斑先生の言葉に反論する前に黙るセシリア

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

いきなり振られてびっくりするセシリア・・・・絶対、頭の中で文句を言っていたな。

銃器を光の粒子に変換し『格納』、新たに近接用の武装を『展開』させようとする…しかし、光の粒子はなかなか像を結ぼうとはしない

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐですっ。・・・・・・・ああ、もうっ！『インターセプター』！」

武器の名前を半ばヤケクソ気味に呼ぶ。それにより、イメージがまとまり、光は武器となって展開される。

たしか・・・これは教科書に載ってる『初心者用』の手段…代表候補生のセシリアにはかなり屈辱的だろうな…

「・・・何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうつもりか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦では初心者に簡単に懐に入らせていたように見えたのだが？…しかも博麗との対戦では簡単に懐にはいられ、遠距離でも負けたように見えたのは気のせいか？」

「あ、あれは、その・・・」

ごにょごにょと歯切れが悪そうなセシリアを一夏が眺める。あ、一夏が睨まれた・・・文句でも言われてるんだろう…

すると、僕の方にもセシリアからの個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）が来る。

『あなたもですわよ！』

『なんでさ』

『あんな戦い方。非常識ですわ！』

『そんなこと言われてもなぁ』

僕は非常識の塊なんだけど…そして悠二、笑うな…

「博麗、お前達も武装を展開しろ」

「はい」

僕は『村正』と『童子切Ｍｋ－？』を『展開』する。

「０．３秒…さすがだな」

「ありがとうございます」

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

「は、はい」

こうして授業は終わった。……ちなみに、僕と悠二が手伝うと言ったら。ものすごく喜ばれた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ？？？～

「ふぅん・・・ここがそうなんだ・・・」

夜、私はＩＳ学園の正面ゲート前に立っていた

「えーっと・・・受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから一切れの紙を取り出すくしゃくしゃになってるけど・・・まあ、いいや。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれはどこにあんのよ」

文句を言っても紙は返事しない。私は多少のイライラと一緒に紙を上着のポケットにねじ込む。……また中でくしゃって音が聞こえたけど気にしない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

ったく・・・出迎えがないとは聞いてたけど、ちょっと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に１５歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？

私は文句を言いながら敷地内を歩き回る…はぁ～誰かいないかな？生徒とか、先生とか、とりあえず受付の所まで案内できる人…

時刻は八時過ぎ。どの校舎も灯りが落ちているし、当然生徒は寮にいる時間だ

あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな・・・・

一瞬、「それは名案！」と思ったんだけど、あの『あなたの街の電話帳』三冊分に匹敵する学園内重要規約書を思い出して、やめる。

まだ、転入の手続きが終わってないのに学園内でＩＳを起動させたら、事である。最悪、外交問題にも発展する。それだけは本当にやめてくれ、と何回も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出して、私の気分はちょっと晴れる。

ふっふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー

正直言って自分の倍以上も歳のある大人がへこへこ頭を下げるのは、ちょっと気分がいい。

昔から、『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いな私にとって、今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は児戯、女のＩＳこそ正義。それもまた気分がいい。私はかつて、『男っていうだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな子供だった

・・・・でも、アイツは違ったなぁ。

とある男子のことを思いそうとすると……

「君、こんなところで何してるの？」

ちょっと……今アイツのこと思い出そうとしてんのに邪魔すんのは誰よ！

不機嫌そうに振り向くと、薄い金色の髪で、その髪は銀と黒のリボンで結んでポニーテールにしていて、眼の色が金と翠のオッドアイで、ＩＳ学園の制服を改造して、コートの様な物を着ている男子？が立っていた……男子生徒の制服を着てるけど…こいつ本当に男子？

～Ｓｉｄｅ幸夜～

「君・・・こんなところで何してるの？」

僕は酒と煙草が欲しくなり、外に買いに行こうとして気配遮断を使って歩いていると、見慣れない女子がいたので、声をかけてみた。

すると、不機嫌そうに振り返り・・・次に驚きの表情で僕を見る。

「あんた・・・誰？」

「僕は1年1組の博麗幸夜…君は？」

「私は・・・『だから・・・・・でだな・・・』・・・ぁ・・・」

女子がアリーナから聞こえてきた声に反応し、走り出す。

「いきなりどうｓ「ちょっと黙ってて」…はい」

このタイプの人間には従った方がよさそうだ…

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

む？この声は一夏…女子は足を止めて何か呟いてる。そして・・・

「いち・・・・」

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ『くいって感じ』って」

「・・・・・・くいって感じだ」

「だからそれがわからないって言って・・・・おい、待てって箒！」

それを見て僕は女子の方を見ると…な、何だ？！物凄く怒っているぞ。

「・・・総合事務受付ってどこ？」

「……こっちだ」

アリーナの後ろの本校舎に案内し、灯りのついてる総合事務受付まで女子を連れて行く。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音（ファン・リンイン）さん」

女子の名前は、凰鈴音か……名前からして中国人か？

「博麗君もありがとうございますね」

「いえいえ」

事務員さんにとりあえず笑みを浮かべ、その後鳳さんを見ると……

……まだ不機嫌そうに唇を尖らせている。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？１組よ。博麗君と同じクラスね。鳳さんは２組だから、お隣ね。あ、そうそう、あの子１組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

・・・いつの間に此処まで情報が来てるんだ？

「２組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと・・・聞いてどうするの？」

……何故だろう、この後どうなるのか分かるのは僕の気のせいだ

ろう…

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって」

凰鈴音の笑顔にはばっちり血管マークがついていた…

一夏…ドンマイ

第蜂話～中国人～（後書き）

幽&幸&悠「「「紅　幸二のトークショー！！」」」

幽「始まりました。紅　幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜でお送りします！！」

幽「あれ？悠二は何処消えた？」

幸「悠二なら幻想郷だよ」

幽「え？どうｓ…ああ、永琳か」

幸「うん、永琳さんだ」

♪～♪～♪

幽「幸夜、電話だぞ？」

幸「ほんとだ～はい、もしもし」

悠『こ、幸夜！！助けてくれ！！』

幸「だが断る！！」

悠『ふ、ふざけるなぁ…『悠二～』ヒッ？！『うふふふふふ』え、永琳、もう止めよ？な？ｎ…イヤァァァァァァ！！！！！！！！！！！』

幸「……」

幽「幸夜、何だった？」

幸「ま、マチガエデンワダッタオ」

幽「そうか？あと、語尾がおかしいぞ？」

幸「ソンナコトナイオ」

幽「なら、良いけど。」

幸「さて！今日のトークショーはここまで！！」

幽「みなさん！」

幸&幽「「さようなら～」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2785y/

IS(インフィニット・ストラトス)〜魔神がいく物語〜

2011年11月29日17時55分発行